

[図画工作・美術]

1年生の図画工作指導

- 色に魅せられて子どもが変わる造形あそびと鑑賞授業 -

長谷川太郎*

1 問題と研究の目的

「変になるからやりたくない。」「絵が下手だからかきたくない。」「きっとつまらないから遊びたくない。」4月初、そんな言葉が子どもたちから聞こえてきた。教員7年目にして初めて担任した1年生であった。この1年2組は、絵をかくことや文を書くことに抵抗を感じる子どもが実に多い。そして、初めてのことに對しても「きっとつまらないから」と遊びにも参加しようとしなない。

活動することに抵抗を感じて小学校に入学してきた子どもが多いことに驚かされた。可能性は無限に広がっているのに、やってみる前からあきらめていては、何も始まらない。しかし、なぜ、この子どもたちはやってみようとしなないのか。また、絵が下手だから描きたくないと感じてしまっているのだろうかと疑問が湧いてくる。

末永蒼生氏の著書には、絵が下手だから描けないと感じている子どもについて「自分とほかの人とはちがうという、客観的な視野をもちはじめたということ。だいたい5～6歳ごろからはじまるようです。このような視野の広がり、そのこと自体、すばらしい成長だと思えます。そこで、自分はダメなんだといった思いを子どもがかかえたままですと、様々なことへ自信や意欲をうしなってしまうがち¹⁾」と述べられている。1年2組の子どもたちもまた、成長過程で自信を失って入学してきていると推測される。

では「よし、やってみよう。」と子どもたちが自信をもって活動できるためには、何が必要なのか。図画工作（美術教育）は、「美術の手段を使って子どもたちの人間形成に役立てようとする教育²⁾」である。そこで、この図画工作の活動を軸として、活動する楽しさを体験することを通して、1年2組の子どもたちを、前向きに活動に取り組んでいく子どもたちに育てていくことを目指すこととした。

では、図画工作でどのようなアプローチで子どもたちに活動する楽しさを伝えることができるだろうか。小学校学習指導要領解説図画工作編では、「児童がこのような活動に魅力を感じるのには、材料の形や色などの特徴から思い付き、それをもとに、次から次へと活動を続け³⁾」と形や色の出会いについての重要性を述べている。形や色の出会いから様々なイメージを膨らませ造形的な活動をしていくのである。また、日常私たちは「もの」を見るときに認識していることは、形と色である。私たちは、その形や色の魅力によって感動し、また共感をするのである。この形や色、とかく色については、現在の主な企業でも重要視されている。コカコーラの赤に象徴されるパッケージデザインがその例である。今や商品には色を意図的に用いる時代なのである。「色には力がある。それも人間の心を動かす力である⁴⁾」色によって商品のイメージが大きく変わるのだ。それほど色の力は大きいことを意味している。また、絵を描き色彩を使って元気になる「アートセラピー⁵⁾」でも色の力に注目している。子どもたちは、自分の心を色に表し、また絵を描くことによってメンタルケアをしていくという。絵を描き、色を使うことで子どもたちは元気になるのである。

そこで、本実践では、次の2点について追究していく。まず1点目は、色の魅力を感じることでできる活動を中心に図画工作を展開する。色の魅力を感じることで、子どもたちの絵に対する興味と創作する意欲を高めることができるであろう。2点目は「できない」から「やってみよう」に意識を転換するために、「失敗は成功のもと」を実感できるような試行錯誤から完成させていく活動を取り入れる。「失敗は成功のもと」が子どもたちに何事にも活動していく態度を育てることにつながるのである。この2点を中心に本実践を追究していく。

2 実践の方法

(1) 色の魅力を体感する鑑賞授業

子どもたちの色遣いには感心させられる。私の想像以上の色の組み合わせをする。しかし一方で、絵を描くことに抵抗を感じている子どもたちは、いつも同じ色しか用いなかったり、暗い色を使っていたりする傾向があった。そこで、「色の持つ力」を子どもたちが感じ「この色使ってみよう」と思えるような鑑賞授業を設定した。

鑑賞について、学習指導要領では「児童の発達や地域の実態に応じて、すべての学年で独立して指導できるように

* 三条市立四日町小学校

する⁶⁾」とある。また、第1学年及び第2学年B鑑賞の内容項目では、「かいたり、つくったりしたものを見ることに興味をもつようにする⁷⁾」とある。1年生の発達段階にあった絵画を提示することが、作品を見ることや絵を描くことに興味をもたせることに強くつながると考えた。

そこで、子どもたちに提示する絵画は、主に色彩が鮮やかな赤・青・黄色・緑が基調となっている作品を選ぶことにした。また、子どもたちが共感しやすい風景画や人物画も提示する。風景画や人物画では、多様な表現の絵画を用意し、様々な表現方法があることに気が付かせていく。提示する作品は、色彩が鮮やかな画家の作品を用意した。主にゴッホやルノワール、いわさきちひろなどの作品である。この鑑賞授業を通して子どもたちの色彩感覚を高め、絵のすばらしさを実感できることや、絵を描くことは楽しいことと感じ、創作意欲が高まることをねらいとする。

(2) 「失敗は成功のもと」が実感できる題材

入学して間もない1年2組の子どもたちは、「失敗するからいやだ。」の言葉に表れるように「上手さ」を求めている傾向があった。子どもたちにはとにかく「やってみる」ことと「できた喜び」を体験させたいと考えた。また、「どのようにしたら思い通りになるのか」と試行錯誤できることも大切にする。「もしかしたら楽しそう。」とわくわくし、「失敗してもいいからやってみよう。」と「失敗は成功のもと」が実感できるような題材を設定する。主に次の2点の要因が含まれることが重要であると考えた。

ア. できあがり予想外の模様や形になること

イ. 試行錯誤ができること

この要因が含まれる題材によって、子どもたちの造形的な活動の意欲を高めることができるのである。その題材として、「くるくるチョッキン」「ペタペタペタン」の2つを実践し、検証していく。

3 実践と結果

(1) 色の魅力を体感する鑑賞授業

① 色のアンケートより

9月、1年2組の子どもたち(男13人、女12人合計25人)を対象に好みの色についてアンケートを採った。アンケートの結果から、色の好みは多様であることが分かった。(図1)特徴的なものは、赤・青は、男子に多く、パステル系の水色やピンクは、女子に多いことである。また、「なし」と回答している子どもが、1人いる。

実際に絵を描くときには、水色しか使わない子どもや黒や茶色を多く使い暗い絵になる子どももいる。「なし」と答えたHくんは、よく黒や茶色を多く使い、絵を描くことが苦手という。アンケートで、複数の色を選んでいる子どもは、絵を描くことが好きと感じている子どもたちでもあった。この結果から、使う色の幅が広いことと絵が好きと思えることに関連性があると考えられる。

そこで、絵の苦手な子どもたちが色に魅力を感じ、自己の表現の幅が広がるような活動を実践することにした。次の2つの実践は、色についての鑑賞授業の取り組みである。

② 算数の「かたち」からクレーの絵の出会い

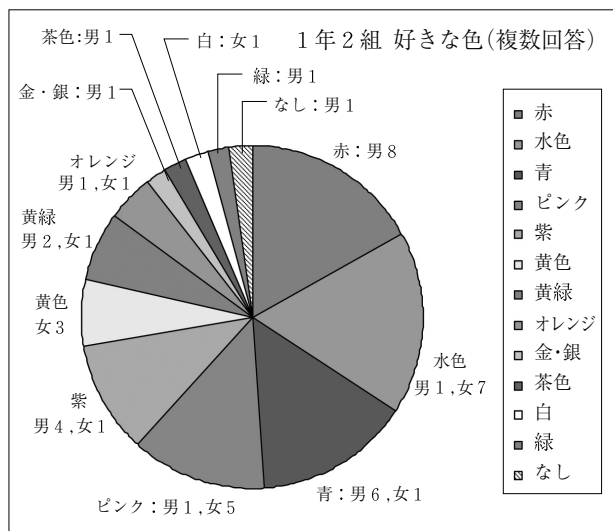
算数の「かたち」の学習で、三角形や四角形の型紙を用いて絵を描いていたときである。子どもたちは、三角形や四角形を用いて自由にのびのびと絵を描いていた。私はその子どもたちの絵に、パウル・クレーの作品を思い起した。早速、子どもたちにクレーの作品に合わせて谷川俊太郎が詩を書いた「クレーの絵本⁸⁾」を紹介してみた。

子どもたちは、クレーの作品に惹きつけられた。1枚1枚絵本をめくると、子どもたちの歓声やため息が大きくなっていった。自分たちが描いている絵と同じように三角形や四角形があることにすぐに気が付いた。また、クレーの色遣いに興味をもったようでもあった。「すごくきれい。」と何人も言葉に出している。子どもたちに人気があったのは、「庭園建築の設計図」(絵1)や「黄金の魚」であった。作品は、カラーコピーをして教室の廊下に掲示し、いつでも子どもたちが見ることができるようにした。

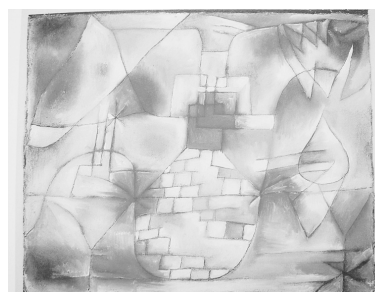
給食の準備中や休み時間など、子どもたちはクレーの作品を見ながら、「この絵が好き。」とか「この絵きれいだね。」など絵を見ながら会話をしていた。

1年生の子どもたちにとって、クレーの絵はとても魅力的で、関心の高い絵であったのだ。

その後の活動では、「クレーさんみたいな色を使いたい。」と話しながら絵の色を塗る子どもも数人いた。特にS君



【図1 色についてのアンケート】



絵1「庭園建築の設計図」

はパウル・クレーの色遣いに魅せられたのか、鮮やかな色を画用紙に塗っていった。(絵2) S君は作品のできあがり非常に満足していた。今までにない鮮やかな色遣いをしたのである。パウル・クレーの絵を見て、S君の色の感覚が高まり、表現の幅が広がったのである。このS君の変化からも、子どもたちの感性にパウル・クレーの作品がぴったり合ったと言える。

③ 世界の名画を鑑賞する「お気に入りさがそう」

12月。世界の名画を鑑賞する「お気に入りさがそう」の実践を行った。この活動でねらうことは3つある。1つめは、色の魅力を感じる。2つめは、様々なジャンルの絵を鑑賞することを通して絵に関心をもつこと。3つめは、自分の気に入った絵を見つけることである。

まず、絵に関心をもたせる第1歩として、色の魅力に着目させていく。色に特徴のある絵画を提示することで、色のもつ力やイメージを感じられるようにする。次に、様々な絵画表現に出会わせる。子どもたちが体験したことのないような不思議で楽しくなるような絵画を提示する。本実践では、次の作品を用意し子どもたちに提示した。(図2)

作品を提示するときは、黒板の前に全員を集め、作品を目の前で見ることができるようにした。また、最初の色のイメージを大切にしようと子どもたちに話してから始めた。色の提示する順番は、黄色・青・赤・緑である。色の印象を引き立たせるように、この順番を選んだ。

始めにゴッホの「ひまわり」を提示した。(絵3) 子どもたちからは、ため息と歓声があがった。「すごい。」「花がきれいだったと思った。」「色がはみ出ていなくてきれいにぬってある。」と感想が次々と発表された。

次の青の絵では、いわさきちひろの「カーテンにかくれる女の子」を提示した。「さみしそう。」「恥ずかしいのかな。」と感想が発表された。

赤では、いわさきちひろの「赤い毛糸帽子の女の子」(絵4)を提示した。「女の子がかわいい。」「雪遊びをしてさむいのかな。」「さむそうだけどきれいなえ。」と子どもたちは感想を述べている。また、棟方志功の「青森ねぶた」では、「ちょっと怖い感じがするけどきれいだ。」「じごくのような感じがする。」など感想が述べられた。この赤の作品の中では、いわさきちひろの絵は、子どもたちが「お気に入り」として多くの子どもが選んでいる。

緑の絵では、ゴッホの「ゴーギャンのイス」を提示。(絵5) 赤を見た後での緑のためか「落ち着く。」と何人も発言する。その中、K君が「何でろうそくがイスのところにあるの。」と質問してきた。絵をよく見ている証拠である。私は、「ゴッホは、ゴーギャンという友達と暮らしていたけれど、別々に暮らすことになった。そのゴーギャンの使っていたイスだそうです。」と伝えた。子どもたちは静まりかえって聞いていた。この「ゴーギャンのイス」については、その後の子どもたちの感想カードに「はなれてさみしかったから、かいたのかなあとおもった。」「ゴッホさんはきっとさみしくておおいでにのこる絵をかいたのかな。」「ゴーギャンのイスにすわってみたい。」と何人もの子どもたちが感想を書いている。

最後に提示した作品は、ピカソの「泣く女」である。(絵6) 私自身、子どもたちの反応が予想できなかった作品であった。実際には、子どもたちが絵に対して発言したくて挙手した数が一番多かった作品であった。子どもたちはピカソの絵に驚き、また様々な発見をしていた。「ロボットみたい。」「目がダイヤモンドみたいできれい。」「黄色の顔がトラみたい。」「泣いているときの顔みたい。」「いろいろな色をつかっていてすごい。」「歯がもげて、またなおしているのかな。」などの感想が発表された。

当初予定していた作品は、すべて見せることはできなかった。多様な表現の絵画作品を紹介するために、エッシャーやアルチン・ボルトなどの「だまし絵」も用意していた。ところが、絵に対する子どもたちの予想以上の反応



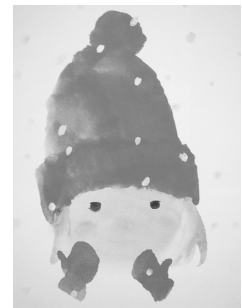
絵2 S君「にじのせかい」

黄色：ゴッホ「ひまわり」、マルク「黄色い牡牛」
長谷川太郎「月夜のきつね」
青：いわさきちひろ「カーテンにかくれる少女」、
シャガール「ステンドグラス」、ゴッホ「ひまわり」
長谷川太郎「家族のかたち」
赤：ゴッホ「ぶどう畑」、棟方志功「青森ねぶた」
いわさきちひろ「赤い毛糸帽子の女の子」、ムンク「叫び」
緑：ゴッホ「ゴーギャンのイス」、「オヴェールの風景」
その他
風景：モネ、シニャック、黒井健
人物：ルノワール、ゴッホ、モディリアーニ、ピカソ

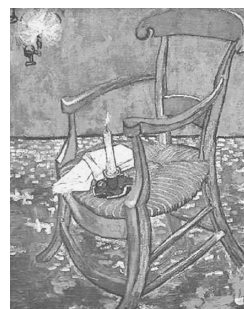
【図2 鑑賞授業で提示した絵画作品】



絵3「ひまわり」



絵4「赤い毛糸帽子の女の子」



絵5「ゴーギャンのイス」



絵6「泣く女」

に、予定していた時間をオーバーする結果となってしまった。また、人物画に非常に興味をもつ子どもが多く、じっくりと作品を見たいと主張していたため、「だまし絵」は提示しないことにした。

後半、鑑賞した作品の中から、お気に入りの作品を見つけて、その作品の名札に直接シールを貼る。鑑賞カードに記入する前に自由に鑑賞する時間を設け、作品に対して自分の意思表示をするのである。文章に表すことが苦手な子どもでもシールを貼ることができた。

すべての子どもが作品にシールを貼ることができ、また、感想をカードに記入することができた。今回の実践でねらっていた、絵に関心をもたせることとお気に入りを見つけることは達成することができたと言える。色の魅力については、半数以上の子どもが、色についての記述をしている。色のもつ力について子どもたちなりに感じたようである。

(2) 「失敗は成功のもと」が実感できる題材

① 偶然から予想外の形が生まれた「くるくるチョッキン」

5月。とにかく失敗を恐れる子どもたちであった。そんな子どもたちに、失敗したと感じさせるのではなく、偶然できたかたちのおもしろさを体感させ、とにかくやってみることを楽しさを味わわせたいと「くるくるチョッキン」を実践した。用意した物は、折り紙や色画用紙とはさみである。

そこで、まず私が子どもたちの前でやって見せる。私がはさみを使い、紙をぐるぐると切ると、「あ、へびみたいになった。」「すごい。」と子どもたちから歓声があがった。次に、適当に切った紙の切れ端を見せ、「これ、何に見えるかな。」と質問する。「あ。恐竜みたい。」「ワニに見えるよ。」と紙の切れ端から様々な想像が膨らむ。N君の「そうだ、教室を博物館にしようよ。」の言葉で子どもたちの意欲がより高められた。完成する作品を飾るという目的がはっきりした。作品は、子どもたち自身が遊び、また、飾られることで生きてくるのである。そこで、教室の好きな所に飾ってもよいことにした。(写真1は教室の入り口に飾っている様子)



写真1

実際に子どもたちが活動し始めると「なんだこれ。」と教室のあちこちで声が聞こえてきた。子どもたちは、偶然にできた形に、驚きと喜びを感じていた。「それ、すごい。」「かわいい。」と友だちの作った作品を素直に認めている姿も見られた。また、どうしたら星の形に切ることができるのかと試行錯誤を始める子どもも出てきた。「Aさんに聞くと、わかるかも。」と友達同士の教え合いも見られるようになった。

この活動から、子どもたちの取り組む姿勢に変容が見られるようになった。「失敗はだめなんだ。」「やったことないからできっこない。」という気持ちから、「やってみると変なかたちになった。」「不思議なかたちになったよ。」と楽しむ子どもが増えてきた。「失敗は成功のもと」が子どもたちの中に定着し始めてきた活動であったと言える。

② 色と係わり、友達と関わる造形あそび「ベタベタベッタン」

9月中旬。この「ベタベタベッタン」では、色の混ざり合う楽しさを味わわせたいと計画した。また、美しい完成を求めるのではなく、絵の具を塗ること自体を楽しむことや、活動しているその瞬間が重要であると考えた。4～5人グループの共同作品である。一人ではできない表現や友達との係わり合い、刻々と変化していく色を体感できる。子どもたちの色彩感覚だけでなく友達との係わり合いも経験できる貴重な体験となる活動である。

全判の画用紙を各グループに1枚用意した。絵の具はポスターカラーを使用し、一人一人には紙パレットとスポンジローラーを用意した。また、子どもたちは、家から野菜やカップなどスタンプになりそうなものを持参してきた。活動当初、子どもたちは、恐る恐る自分の好きな色を選んでスポンジローラーや野菜などで色をスタンプしていった。スタンプして野菜の形が写ることに感動していた。



写真2

3班は、次第に4人の色が画面いっぱいになってきていた。友だちの色と自分の色が混ざり始める。(写真2)「青と赤の戦いだ。」と4人の子どもたちは、画用紙にローラーでどんどん色をのせていった。「あ、むらさきになった。」とT君は気が付く。「ほんとうだ。」「おもしろいね。」と子どもたちは赤と青を混ぜると紫になることを偶然発見したのだ。その色の変化に喜ぶ3班の子どもたちであった。また、「黄色と緑で黄緑だ。」と他の班の子どもたちも、色の混ざる楽しさを感じ始めた。偶然に混ざることで、色の混色に気が付いていく。遊びながら、色を作るノウハウを学んでいける題材であったのだ。

ところが、1班では、事件が起きていた。「先生困ったよ。やだこの色。」というHさん。自分が塗っていたピンクの上にR君が濃い紺色を塗ってしまったのだ。「どうしよう。」4人の共同制作では予想される子どもたちの葛藤である。「でも、これはこれで、おもしろいと思うけど。」と私の発言に「そうかな。」と渋々活動を再開するHさん。(写真3)グループの活動では、友達のやりたいことも認めていくこと。そして、自分がしたいことを妥協ではなく、一緒に考え修正していくことが必要。Hさんは、もっとすてきになるように考え始めた。一人では決して感じることはない葛藤や喜びが「造形あそび」にはあると気付かされた。後半、どの班も手を使い始めた。手で色を混ぜていくのは、何とも楽しいものである。自分の色が混ざって、いやだと思っていたHさんも、ぐちゃぐちゃに混ぜることを楽

しみ始めた。「下の色が出てきたよ。」「ひっかくと出るんだね。」と新たな発見をしていく。「きもちいい。」と絵の具の感触も楽しむことができた。

90分間の授業を予定していた。時間とともに活動も終了。学級の全員が手で絵の具を混ぜていた。その行為に完全燃焼したのか、もっと続けようという子どもはいなかった。絵の具の片付けと床の掃除をしてから、子どもたちには、絵に合うような題名を考えるように提案した。

子どもたちは、自分たちの作品についてどのような名前にしようかと、真剣に考え始めた。「ここがトンネルに見えるでしょ。」「山に見えるよ。」「トンネル山だ。」「1年2組も付けよう。」と作品のイメージを班の友達と考えて話し合うことができた。

すべての班が、けんかをすることもなく納得のいく題名を考えることができたのである。一見色が混ざってしまい汚く見えるが、子どもたちの思いは題名に表されていたのである。活動が楽しかったこと。そして満足しているからこそ、題名について悩むことなく付けることができたのであろう。Hさんの班は「みらいのほしぞら」、青と赤が混ざり合った3班は「しんかい（深海）」、ひっかいて下からピンクや黄色がでてきた6班は「なないろのせかい」と名付けた。この子どもたちの感性には驚かされた。

この「ペタペタベタン」での経験は、その後の子どもたちの作品に影響してくる。3学期には、一人一人の作品としてスタンプ版画をした。色を混ぜて好みの色を作り出すことや、配色を考えて制作する子どもが多かった。1学期の絵では、色が混ざってしまった子どもたちも自分の作品に満足することができた。色を意識させるこの造形あそびは、子どもたちの苦手意識も取り除ききっかけとなったといえる。今回の活動のように手で絵の具を感じ、色が混ざり合うことが体験できる造形あそびは、子どもたちに大きな経験を与えてくれたのである。



写真3

4 考察

(1) 色の魅力を感じる活動は子どもの表現を豊かにする

① H君の変容から

鑑賞授業「お気に入り色をさがそう」では、絵が苦手な好きな色は「なし」と答えていたH君が、感想カードには、ルノワールの「レースの帽子の女の子」（絵7）を選んで書いている。ルノワール以外の気に入った作品でシールを貼ったものには、ゴッホの「ぶどう畑」いわさきちひろの「赤い毛糸帽子の女の子」マルクの「黄色い牡牛」があった。いいなと思った色については、「赤」と答えていた。確かに、H君の選んだ作品はすべて赤が効果的に使われている作品である。今回の鑑賞授業によって、H君の好みの色ははっきりしたのかについては断定できない。だが、好きな色は「ない」と答えていたH君が、はっきりと「赤が好き」と言えたことは嬉しいことである。H君の感性に訴えた作品を提示することができたことであり、今回の授業が効果的であったと言える。



絵7 「レースの帽子の女の子」

② 1年生の発達段階として有効であった絵画作品

提示した作品すべてに、子どもたちのお気に入りのシールが貼られていた。その中でも、感想カードに記入された作品を[表1]にまとめた。

作者名	作品名	基調色	人数	作者名	作品名	基調色	人数
ゴッホ	ゴーギャンのイス	緑	5	シニャック	サン・ペトロの港	青	3
ゴッホ	ひまわり	黄色	4	シャガール	ステンドグラス	青	2
ゴッホ	バラ	緑	2	マルク	黄色の牡牛	黄色・赤	2
ゴッホ	オヴェールの風景	緑	1	ムンク	さげび	赤	2
ゴッホ	自画像	青	1	いわさきちひろ	赤い毛糸帽子の女の子	赤	9
ゴッホ	ぶどう畑	赤	1	いわさきちひろ	カーテンにかくれる女の子	青	2
ルノワール	ブランコ	青	2	棟方志功	青森ねぶた	赤	1
ルノワール	レースの帽子の女の子	青・白	2	黒井健	五月	黄色・紫	2

[表1 1年2組 お気に入りの選んだ作品] (複数回答)

一番人気のあった作品は、いわさきちひろの「赤い毛糸帽子の女の子」であった。主に女子に人気が高かった。赤の色が印象的であったことと、1年生に共感しやすいかわいらしい女の子であったことが理由として考えられる。

二番人気はゴッホの作品の「ひまわり」と「ゴーギャンのイス」であった。「ひまわり」については、3人が、「黄色がきれいだから好き」と感想を述べている。ゴッホの色彩に感動し、また黄色の魅力を感じたものと考えられる。「ゴーギャンのイス」では、ゴッホの気持ちについて感想を3人が述べている。私がゴッホとゴーギャンのことについて説明をしたことで強く印象に残ったのだと考えられる。ゴッホの作品全体としては、延べ14人が選んでいる。私の選んだ作品の中でもゴッホが多かったのも理由の1つとして考えられるが、そのこと以上に、ゴッホの色について共感した子どもが多かったことが言えるだろう。赤・青・黄色・緑と作品の基調色が作品によってはっきり異なっ

ているのもゴッホの特徴である。色の魅力を伝えるものにゴッホの作品は非常に有効的であると言える。

授業中、子どもたちが大きく関心を寄せていたピカソの「泣く女」についてお気に入りとしての記述は、残念なことにまったく無かった。提示したときの子どもたちの反応は一番大きかったと感じている。しかし、子どもたちの興味を惹きつけた作品が必ずしもお気に入りとして選ばれるわけではないようである。ただ、ピカソの「泣く女」については、1年生の子どもたちの絵に対する興味を高め、集中して作品を見ていたことは事実である。このことから、ピカソの「泣く女」は、1年生の子どもたちに見せたい作品の1つであると感じている。

実際に授業で提示した作品（図2を参照）は、すべてにシールが貼られたことから、1年生の発達段階において適切であったと考える。特にゴッホやルノワールについては、非常に人気が高い。また、点描の「サン・ペトロの港」も人気があり、美しい色に心がひかれることが分かった。

③ 色の魅力を感じることで子どもが変わる

S君の作品（絵2）に見られるように、パウル・クレーの作品の色遣いに魅力を感じたことで、その後のS君の作品に明るさが出てきている。もともと絵を描くことが好きなS君ではあったが、色の使い方に関しては、濁ってしまったり、同じ系統の色遣いになったりしていた。クレーの作品に出会ったことで、表現が豊になったと言える。

造形あそびの「ペタペタベッタン」では、色の変化を体で感じる事ができた。白い画用紙に自由に色をのせていく過程で、「きれい。」と子どもたちのつぶやきから伺えるように、確かに子どもたちは色の魅力を感じていたのである。また、他の色と混ざり合う経験をする事で、色の混色についても学習することになる。その後の制作活動では、「赤と青で紫になるよ。」とアドバイスをする子ども達の姿が見られた。きれいに色が混色していくことや、逆に混ぜすぎると暗い色になってしまう経験が、その後の子どもたちの色遣いに大きく影響している。決まった色しか使わなかった子どもも複数の色を選択するようになっていく。4月の入学当初に比べ、絵に対する抵抗も低くなり、子どもの表現に幅が広がってきたと言える。色の魅力を体感できることは、子どもの表現力を高めることにつながるのである。

(2) 予想外と試行錯誤の経験が「失敗は成功のもと」を実感させ、活動の意欲を高める

「くるくるチョッキン」では、折り紙を折ってはさみを入れることで、子どもが予想していない形ができあがる。紙を開いていくときの期待感とできあがった模様のおもしろさに感動することができる。「なんだこれ。」と子どもたちが予想外の形に驚き、また喜んでいた。頭で考えるのではなく、まずやってみる事の楽しさを体験する貴重な活動であったと言える。また、「星の形」など、決まった形を作ろうとするとき、ある特定の方法が必要となる。その方法を見つかったり、計画的に進めたりする過程で、必ず失敗することになる。その失敗からそのやり方が違うことを知り、次に生かしていく。また、失敗したからこそ、新しい模様を見つけることもできる。失敗することが保証されている環境は、子どもたちを伸び伸びと活動させる。その活動は、自分の見つけた模様に愛着をもち、また、表現に自信をもつことにつながる。飾った作品と一緒に子どもの記録写真を撮ったとき、実に嬉しそうに作品と写っていた。それは、自分の生み出した作品に愛着をもち、自信をもっていることの表れであろう。

「ペタペタベッタン」では、刻々と変わる色や形の変化を楽しむ事ができた。そもそも「失敗」という概念が消え去り、活動それ自体が楽しいものを感じていたようだ。この題材は、色が混ざり合う楽しさを絵の具の触感と共に、直接手で感じる事ができるものである。つい完成作品に目がいきがちであるが、この題材ほど、制作過程に変化があり子どもたちのやりとりにドラマがあるものはないと感じた。十分に造形活動を堪能し友達と活動時間を共有したからこそ、作品に迷わず題名をつける事ができたのであろう。この活動によって子どもたちには、色の感覚と造形活動を楽しむ力が身に付いた。そして他の活動においても「やってみよう」という子どもたちの姿が見られるようになったことは大きな成果である。

5 今後の課題

今回、1年生の子どもたちに活動の楽しさを実感させ意欲を高める鑑賞と造形あそびを中心に実践してきた。1年生の発達段階では、それほど形に対する欲求は高くないが、どうやって描けばいいか悩む子どもも出てきた。学年が進につれて、写實的に描きたい欲求やイメージ通りに絵が描けない不満が出てくる。この子どもたちの成長に対して適切な経験をさせていくことが、今後の絵に対する苦手意識を解消することにつながるであろう。絵が描きたいけれども思うように描けない子どもたちと、絵の楽しさを共に考えていけるような実践をしていきたい。

〈参考文献〉

- 1, 5) 末永蒼生 (2000) 「答えは子どもの絵の中に」 講談社, 70-98.
- 2) 箕田源二郎著 (2003) 「子どもたちに美術のうたを」 新日本出版社, 53-54.
- 3, 6) 文部省 (1999) 「小学校学習指導要領解説 図画工作編」 日本文教出版株式会社, 4-7.
- 4) 南雲治嘉編 (2005) 「COLOR STRATEGY 色彩戦略」 グラフィック社, 2-3.
- 7) 文部省 (1999) 「小学校学習指導要領解説 図画工作編」 日本文教出版株式会社, 26.
- 8) パウル・クレー (絵) 谷川俊太郎 (詩) (1995) 「クレーの絵本」 講談社